

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 11 月 21 日現在

機関番号：32408

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25501012

研究課題名(和文) 観光資源の持続的保全と利用を可能とする地域運営システムの応用研究

研究課題名(英文) The Research of the Resources and Tourism Destination Management System which Enables Preservation and Sustainable Use of Tourism Resources

研究代表者

海津 ゆりえ (KAIZU, Yurie)

文教大学・国際学部・教授

研究者番号：20453441

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、観光地において観光資源が持続的に保全され利用に資するためのメカニズムと、そのメカニズムを実現するための地域運営システムを明らかにすることを目的とし、東日本大震災被災地を含む自然資源型観光地および文化資源型観光地にて参与観察を行った。観光はツアーを構築する過程において地域内の複数の主体間の連携を構築することが明らかとなった。また、観光者の視線は地域資源の日常性・文化性・伝承性・権威性・担保性等に注がれ、これらの価値を普遍化し、観光資源の持続的保全と利用を実現することが明らかとなった。本研究はこの結果をモデル図にまとめた。

研究成果の概要(英文)：This study was designed to clarify the sustainable mechanism of conservation and utilization of tourism resources, and its management system. Research method was participant observation with through demonstration tour planning and implementation between the stakeholder relations at different type of tourism destination areas, including the Great Japan Earthquake suffered areas. As a result, it cleared that tourism enables to build connections between multiple stakeholders in the region in the process of building a tour. In addition, tourists gaze to generalize the value of local resources, achieve sustainable conservation of tourism resources was cleared.

研究分野：観光

 キーワード：観光資源 地域運営システム 震災復興 風評被害 エコツーリズム 岩手県宮古市 福島県北塩原村
京都府京都市

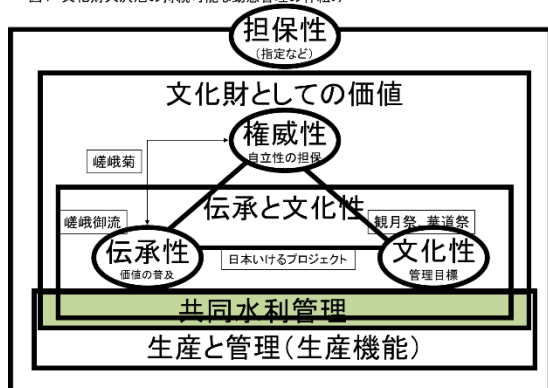
科学研究費助成事業 研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

申請者らは、20年にわたりエコツーリズムという切り口から国内外における地域振興と観光の接点に関するプロジェクトおよび調査研究に携わってきた。エコツーリズムとは、地域固有の資源を、観光を通して活用することにより、保全や地域振興に還元する活動である。エコツーリズムの本質は、地域資源の保全・継承と観光振興の両立にある。多数の事例から真板・海津は、エコツーリズムを実現するために必要な条件を「主体」から分析し、図1の5つの主体モデルに整理した(1999)。また真板・河原(2009)は、大覚寺大沢池を題材に、文化遺産が今日まで保全・継承されてきた仕組みとして、6つの要件すなわち①権威性、②伝承性、③文化性、④生産性、⑤維持管理システム、⑥法的担保性が必要であると結論した(図1)。

これらのモデルを基盤として、より資源性と地域に即した観光資源の保全・継承と活用の要件を明らかにすることを目的として本研究の着想に至った。

図1 文化財大沢池の持続可能な動態管理の枠組み



2. 研究目的

本研究は次の3つの目的を設定して行い、これらを踏まえて新たなモデルの構築を図ることとした。

<研究1>

観光資源の保全・継承に関するメカニズムと運営システムを明らかにすること。主として宮古で実施した。

<研究2>

観光者の参画可能性検証実験を行い、観光者の関与の可能性と役割を明らかにすること。

宮古・北塩原で実施した。

<研究3>研究成果の地域への還元手法を明らかにすること。全地域で実施した。

3. 研究の方法

本研究は、資源タイプの異なる複数の研究対象地において実際にツアーの企画・実施を伴う参与観察により行った。「自然」については福島県北塩原村(以下北原とする)、「文化」は①伝統芸能について岩手県宮古市(以下、宮古とする)、②生活文化について京都市嵯峨野エリア(以下、嵯峨野)、長崎県平戸市(以下、平戸とする)、岩手県二戸市(以下、二戸とする)とした。3つの研究目的と対象地における研究内容は以下の通りである。

研究1

・宮古：資源調査、体制づくり

研究2

・宮古：ツアーの企画実施・観光者参画実験
・北塩原：ツアーの企画実施・観光者参画実験

研究3

・宮古：フェノロジー(暦)、マップ、黒森神社パンフレットの作成

・北塩原：集落散策マップの作成

・嵯峨野・平戸・二戸：フェノロジー(暦)

4. 研究成果

<研究1>メカニズムと運営システム

宮古市では伝統芸能「黒森神楽」と神楽を奉納する黒森神社を主資源とし、例大祭に合わせて市民と観光者がともに参加するエコツアーを企画し、研究期間を通じて毎年7月に開催した。当初は震災復興支援に向けた研究プロジェクトであったが、最終年度には市役所・観光協会・神社総代会・神楽衆・ボランティアガイド・市民の間に連携が生まれ、伝統芸能への文化資源としての価値の再認識が実現した。観光者や外部研究者が加わることで、価値の確認と発信という新しいサイクルが出来たと言える。

<研究2>観光者参画実験

北塩原、宮古において学生による資源調査と観光者参画ツアーの企画、実施を行った。

北塩原では現地での協力組織との検討により、震災からの風評被害の克服に資することを目的として、申請時に記載した五色沼を変更し、北山地区および大塩地区(農村エリア)

を対象とした。農作業や集落散策、食体験等を主資源とするエコツアーを企画し、2014・2015年度に催行した。

宮古と北塩原でのエコツアーにおいて、実施後に参加者側と現地側にヒアリングまたはアンケートを行った。その結果、共通して以下の点が明らかとなった。

◎対地域住民

- ・当たり前と思っていた資源の価値の見直し機会となり、誇りの醸成につながった。
- ・調査段階から参加した学生との交流が世代間会話となり、楽しかった

◎参加者

- ・身近にあっても行く機会がないが、ツアーになって訪れることができた（近隣参加者）
- ・宝の価値を知り感動した（遠方参加者）
- ・神楽や神社の美しさに感動した（宮古）

このように、資源調査（「宝探し」）を行うだけでなく、ツアーになることで交流が実現し、資源の価値の認識が高次化されることが明らかとなったといえる。

<研究3> 地域への還元手法の開発

各地域では資源調査結果を成果物にとりまとめ、地域にフィードバックした。宮古は食のフェノロジー（暦、図2）、ツアーコースマップと神社解説パンフレット、北塩原は北山および大塩地区のウォーキング用マップ、嵯

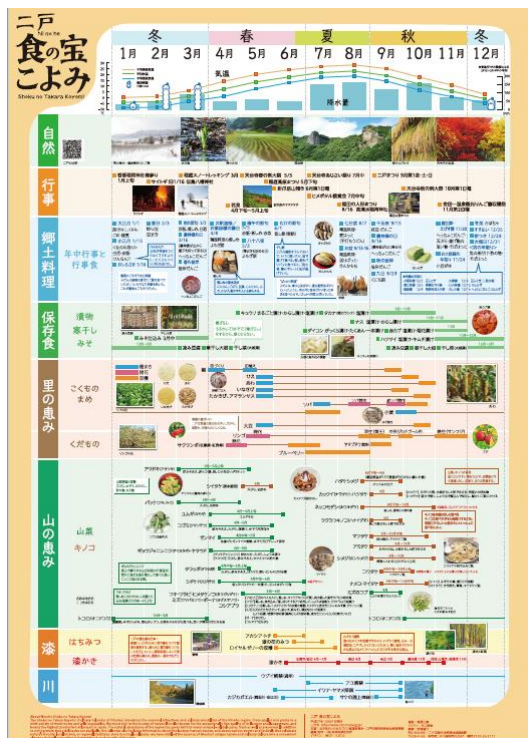


図2 二戸食の宝こよみ

峨野と平戸、二戸ではフェノロジー（暦）を作成した。これらは研究期間終了後も地域が本研究の成果を主体的に活用できることを目的としている。宮古では研究期間終了後も地域主体によりツアーが催行されることが決まり、マップが配布される他、住民によるガイド育成にも利用されている。

以上の研究の結果、資源の持続的保全と利用を可能とする地域運営システムに関わる新たなモデルとして、図3のように書き換えることができた。これは、「地域資源」の持続的保全と利用を可能とする地域運営システムを著していた図1に「観光」の視点が加わった際の、新たな地域運営システムのモデルである。観光は観光者の視線は地域資源の日常性・文化性・伝承性・権威性・担保性等多様に注がれ、普遍化することが明らかとなった。

また宮古の事例から、このメカニズムを維持するためには、地域が主導する観光に必要な多様なステイクホルダー間の協力・連携体制が求められることも明らかとなった。

以上が本研究の結論である。

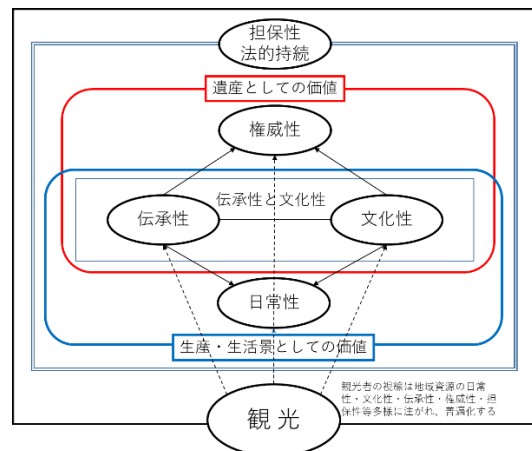


図3 観光資源の持続的保全と利用を可能とするメカニズム試論図

<引用文献>

真板昭夫・河原司 (2010) 大沢池景観修復プロジェクト—古代と現代を結ぶ文化遺産. 関西自然保護機構会報 32 (2), 141-144

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 14 本)

- ① 海津 ゆりえ (2016) 芸能「黒森神楽」による震災復興：岩手県宮古市・黒森神社におけるエコツーリズムの事例から。

CATS 叢書 9: 43-61

宝さがし調査. 交流文化: 26-33

- ② 橋本 俊哉 (2016) 会津北塩原村における風評被害とその克服に向けて. CATS 叢書 9: 69-85
 - ③ 橋本 俊哉 (2016) 観光地の「災害弾力性」試論 (稲垣勉教授・玉井和博教授退職記念号). 立教大学観光学部紀要: 90-98
 - ④ 橋本 俊哉 (2016) 観光地の「災害弾力性」試論. 立教大学観光学部紀要 18: 90-98
 - ⑤ 真板 昭夫 (2016) 震災等の復興における観光創造とは. CATS 叢書 9: 3-7
 - ⑥ 相澤 孝文・橋本 俊哉 (2015) 福島県北塩原村における風評被害に関する住民意識の類型化: 観光の風評被害克服に向けて. 日本観光研究学会全国大会学術論文集 30: 325-328
 - ⑦ 橋本 俊哉・海津 ゆりえ・相澤 孝文 (2015) 東日本大震災における観光の風評被害に関する研究: 福島県北塩原村の「風評手控え行動」の分析を通して. 立教大学観光学部紀要: 3-12
 - ⑧ 森重 昌之・海津 ゆりえ・内田 純一 (2015) 地域社会における観光ガバナンスの実践の意義と役割: 三重県鳥羽市と北海道標津町の観光推進組織の事例から. 日本観光研究学会全国大会学術論文集 30: 65-68
 - ⑨ 相澤孝文・橋本 俊哉 (2014) 自然散策が及ぼす心理的・生理的効果の性格特性による比較. 立教大学観光学部紀要: 99-114
 - ⑩ 真板 昭夫 (2013) 持続的な観光資源の保全と利用を可能とする地域づくり運営システムの応用研究分科会 (日本観光研究学会研究分科会 成果報告). 観光研究: 日本観光研究学会機関誌 24: 51-54
 - ⑪ 橋本 俊哉 (2013) エコツーリズムによる宮古市の震災復興支援—千年の絆を紡ぐ
 - ⑫ 海津 ゆりえ・森重 昌之 (2013) 本土と離島の関係性を前提とした観光政策に関する研究: 三重県鳥羽市答志島を事例として. 日本観光研究学会全国大会学術論文集 28: 109-112 他
- [学会発表]計5回
- ① 海津 ゆりえ (2015/9/19) 岩手県宮古市における芸能と復興ツーリズム. 第4回CATS観光創造研究会
 - ② 橋本 俊哉 (2015/9/19) 会津北塩原村における風評被害とその克服に向けて. 第4回CATS観光創造研究会
 - ③ 真板 昭夫 (2015/9/19) 震災等の復興における観光創造とは. 第4回CATS観光創造研究会
 - ④ 橋本 俊哉 (2015/11/1) 「風評手控え行動」からみた風評被害への対応. 第4回CATS観光創造研究会
 - ⑤ 相澤孝文・橋本 俊哉 (2015/11/29) 福島県北塩原村における風評被害に関する住民意識の類型化—観光の風評被害克服に向けて—
 - ⑥ Yurie Kaizu (2014/11/17) Ecotourism as a tool to assist community recovery from natural disasters: Case Study of Miyako, Iwate
- [図書・報告書]計5件
- ① 真板昭夫・京都嵯峨芸術大学 (2014) 「京都嵯峨野の和み暦」
 - ② 海津 ゆりえ・橋本 俊哉他 (2015) 新現代観光総論. 学文社
 - ③ 海津 ゆりえ・橋本 俊哉・真板昭夫 (2016) 「自然災害復航における観光創造」CATS 叢書 9
 - ④ 立教大学観光学部橋本俊哉研究室 (2016) 「観光資源の持続的活用による風評被害の克服に関する研究—福島県北塩原村を事例として」立教大学
 - ⑤ 真板昭夫 (2013) 「草魚バスターズ」飛鳥新社

6. 研究組織

(1) 研究代表者

海津 ゆりえ (KAIZU, Yurie)
文教大学・国際学部・教授
研究者番号: 20453441

(2) 研究分担者

橋本 俊哉 (HASHIMOTO, Toshiya)

立教大学・観光学部・教授

研究者番号：50277737

真板 昭夫 (MAITA, Akio)

京都嵯峨芸術大学・芸術学部・教授

研究者番号：80340537